

「臨床心理系大学教員」の仕事

Work of a faculty member of clinical psychology at university

野島 一彦
跡見学園女子大学
Kazuhiko Nojima
Atomi University

要 約

「臨床心理系大学教員」としての43年間における、5つの仕事(1. 研究, 2. 教育, 3. 臨床, 4. 学内業務, 5. 社会貢献)について振り返り, 多くの様々なクライアント, 患者, メンバーとの出会い, いろいろな関係者との出会いがあったことを嬉しく思い, 感謝していることを述べた。そして, 今後もずっと心理臨床家の道を現役で歩んでいきたいということを書いた。

【Key Words】研究, 教育, 臨床, 学内業務, 社会貢献

I はじめに

筆者は1979年～1980年(1年間)は久留米信愛女学院短期大学, 1980年～1996年(16年間)は福岡大学, 1996年～2012年(16年間)は九州大学, 2012年～現在(10年間)は跡見学園女子大学で大学教員をしてきた。通算43年になるが, 筆者のアイデンティティはいつも「臨床心理系大学教員」であった。そこで本稿では, 2022年3月の定年退職を控えて, 一人の「臨床心理系大学教員」として, どのような仕事をしてきたのかを振り返りたい。

ちなみに筆者が臨床心理の道を歩み始めたのは, 1964年にカウンセリングという科目が置かれていた九州大学教育学部に入学した時からである。1970～1975年に大学院, その後助手, 研究生を経て1979年から「臨床心理系大学教員」となった。

II 5つの仕事

「臨床心理系大学教員」として筆者は大きく分けると5つの仕事(1. 研究, 2. 教育, 3. 臨床, 4. 学内業務, 5. 社会貢献)をやってきたように思う。以下, それぞれについて詳しく述べよう。

1. 研究

「臨床心理系大学教員」として研究は重要であり, かつ楽しいものであった。というのは, 研究は自分の興味・関心や問題意識をもとに自由に取り組むことができる創造的な作業だからである。そして研究は研究論文としてまとめていくのであるが, それが積み重なっていくことはとても嬉しいことである。

①筆者が最も力を入れたのはエンカウンター・グループの研究である。修士論文

(1972年)も博士論文(1998年)もこのテーマで書いた。

ちなみにエンカウンター・グループを含む集中的グループ経験と集団精神療法の文献を収録した文献リストをまとめてきた。「集中的グループ経験に関する文献リスト」(~1969)を11点、「集団精神療法に関する文献リスト」(~1989)を2点、「集中的グループ経験」と「集団精神療法」に関する文献リスト(1990~2020)を31点。1996年版からは坂中正義氏の協力を得た。

②個人カウンセリングの実践はかなり多くしてきたが、論文化したものは少ない。

③また、スーパービジョンも研究テーマであったが、論文化したものは少ない。

(1) 研究論文, 書籍等

①筆者は1970年に九州大学大学院教育学研究科に入学し、1972年に「エンカウンター・グループの臨床心理学的研究」というテーマで修士論文を書いた。1998年に「エンカウンター・グループの発展段階におけるファシリテーション技法の体系化」というテーマで博士論文を書いた。

②学会誌である「相談学研究」, 「人間性心理学研究」, 「心理臨床学研究」, 「集団精神療法」等に研究論文を掲載してきた。

③また、大学の紀要である「九州大学教育学部紀要(教育心理学部門)」, 「九州大学教育学部心理教育相談室紀要」, 「久留米信愛女学院短期大学紀要」, 「福岡大学人文論叢」, 「福岡大学総合研究所報」, 「九州大学心理臨床研究」, 「九州大学心理学研究」, 「跡見学園女子大学臨床心理学科紀要」, 「跡見学園女子大学心理教育相談所紀要」, 「跡見学園女子大学心理学部紀要」等に研究論文を掲載してきた。

④書籍(編著)としては、『エンカウンター・グループから学ぶ-新しい人間関係の探究』, 『臨床心理学への招待』, 『生徒指導の心理と方法』, 『グループ・アプローチ』, 『パーソンセンタード・アプローチ--21世紀の人間関係を拓く』, 『HIVと心理臨床』, 『エンカウンター・グループと国際交流』, 『臨床心理地援助研究セミナー』, 『力動的集団精神療法--精神科慢性疾患へのアプローチ』, 『グループ臨床家を育てる--ファシリテーションを学ぶシステム・活かすプロセス』, 『心理臨床のフロンティア』, 『ロジャーズの中核三条件〈共感的理解〉』, 『公認心理師への期待』, 『臨床心理学概論』等がある。

公認心理師関係では、「公認心理師の基礎と実践」(全23巻:共監修, 遠見書房), 〈公認心理師分野別テキスト〉(監修:全5巻, 創元社), 〈公認心理師実践ガイダンス〉(監修:全4巻, 木立の文庫)に携わった。

⑤学会誌ではないが、中堅の有志の心理臨床家によって、1988年3月から1998年12月にかけて「心理臨床」(星和書店)という雑誌を季刊で編集・発行を行なったが、筆者もスタート時(当時40歳)から編集委員として積極的に参画した。

(2) 学会(大会)に発表等

筆者の学会発表のデビューは、1971年の日本心理学会での「エンカウンター・グループの基礎的研究」である。それ以後、今日に至るまで毎年、どこかの学会で発表を続けてきた。

主な発表の学会は、日本心理学会、日本教育心理学会、日本カウンセリング学会、日本人間性心理学会、日本心理臨床学会、日本集団精神療法学会である。

2. 教育

(1) 学内

学内での教育としては、次の3つを意識して行ってきた。

1) 〈研究〉指導：授業，研究会，随時の助言等

〈研究〉指導としては、卒業論文の指導，修士論文の指導，学会誌や紀要への投稿論文の指導，それと博士論文の指導を行ってきた。

2) 〈学習〉指導：授業，研究会，随時の助言等

臨床心理学の知識や技法の〈学習〉指導としては、認知的学習だけでなく、体験学習，観察学習，論文・書籍や研修会の紹介等を行ってきた。

3) 〈臨床〉指導：授業，研究会，カンファレンス，スーパービジョン，随時の助言 臨床心理の実践家になるための〈臨床〉

指導としては、とりわけカンファレンスとスーパービジョン(個人スーパービジョン。グループスーパービジョン)に力を入れてきた。

(2) 学外

「臨床心理系大学教員」には学外からも以下のような形で教育を行うことが求められた。

1) 講演会，研修会，他大学等での授業等

内閣官房内閣人事局，中央労働災害防止協会，全日本カウンセリング協議会，桜楓カウンセリング研修会，NPO CESC(セスク)，このはな児童学研究所，はぐくみ心理相談所，東北大学，鳥取大学，札幌学院大学，沖縄国際大学等。

2) 啓蒙的雑誌等への寄稿等

エンカウンター・グループによる友だち

づくり，エンカウンター・グループ：総論，私にとってのロジャーズ，学校におけるカウンセリングのすすめ方の実際，最近の「いじめ」をめぐって“中1ギャップ等。

3. 臨床

(1) 臨床実践

「臨床心理系大学教員」としてとても大切なのが臨床実践である。自分自身の臨床実践に基づいて、教育や研究を行うことになる。

①筆者は〈心理療法〉の個人アプローチとしては主に来談者中心療法のカウンセリングを精神科病院・精神科クリニック(40年間)，大学の学生相談室(26年間)，中高一貫校のスクールカウンセリング(16年間)，大学附属心理教育相談所(10年間)，プライベート・プラクティス(随時)で行ってきた。

②グループアプローチとしては1970年からエンカウンター・グループを中学校，高校，大学，看護学校，看護協会，福祉関係者，産業人，一般人等を対象として行ってきた。また精神科病院で集団心理療法を実践してきた。

③〈スーパービジョン〉は教育とも考えられるが，筆者は〈心理療法〉でクライエントと取り組む時に感じるような緊張感を，スーパーバイザーと取り組む時に感じるので臨床のカテゴリーに入れることにする。形態としては個人スーパービジョンとグループスーパービジョンを行なってきた。

(2) 臨床実践の検討

自分自身の臨床実践の検討のために，スーパービジョンを受けたり，カンファレンスで事例を発表してきた。

4. 学内業務

大学の円滑な活動の運営のために様々な委員会担当を引き受けてきた。九州大学では総長補佐，教育学部長，跡見学園女子大学では心理教育相談所長，地域交流センター長，心理学部長を務めた。学内業務は意外と多くの時間を取られることになるが，必要な大切なものである。

5. 社会貢献

社会貢献としては，学会等の諸団体の役員を引き受ける形で活動してきた。日本心理臨床学会の理事長，日本人間性心理学会の理事長，日本臨床心理士会の副会長，日本集団精神療学会の常任理事，日本公認心理養成期間連盟の常務理事，日本心理研修センターの理事，日本臨床心理士資格認定協会の評議員などである。

学会への貢献に対して，2003年には日本カウンセリング学会から「育てるカウンセリング國分記念賞」，2013年には日本人間性心理学会から「学会賞」，2019年には日本心理臨床学会から「学会賞」を受賞した。

また人間関係研究会の代表，全日本カウンセリング協議会の顧問・スーパーバイザー，はぐくみ心理相談所の顧問・スーパーバイザー，日本REBT協会の顧問，ダイレクトオンラインカウンセリングココロの窓口の顧問・監修者・スーパーバイザーなども引き受けてきた。

Ⅲ おわりに

本稿の執筆をとおして，改めて43年間でふりかえることになったが，5つの領域でいろいろ困難もありながら，何とかやることができた背景には次のようなことがある。

①各領域で難しいことがあったり，複数の領域の難しい仕事が多くなるとやれるだろうかと不安になることがあったが，そのような時は「やれることはやれる，やれないことはやれないのだ」と居直り，そのメモをパソコンに貼り付けていたこと。

②1970年以降，筆者は2つのライフワーク(エンカウンター・グループの実践と研究，心理職の国家資格化)を中核にして仕事をしてきたが，このような明確なライフワークをずっと持ち続けたこと。

③1996年に61歳で膵臓癌のために亡くなった妻が，家庭のことにあまり協力しない筆者を，3人の子どもを抱えつつ仕事と家庭の両立をしながら，筆者が自由に動くことを支えてくれたこと。

④父の「弱音を吐くな」，母の「働くことは傍(はた)を楽にすること」という言葉を時折思い出していたこと。

「臨床心理系大学教員」として43年間，過ごすことができたことを嬉しく思う。この間に，多くの様々なクライアント，患者，メンバーとの出会い，その心理的成長に寄り添うことができて，とても良かったと思う。また，心理臨床を行っていく中で，いろいろな関係者との出会いがあり，多くの刺激とサポートを受け，心理臨床の道を歩み続けることができたことに感謝したい。

筆者は現在74歳であるが，筆者が尊敬するカール・ロジャースが85歳で亡くなるまで，心理臨床家として現役を続けたことを思い，筆者もずっと心理臨床家の道を現役で歩んでいきたい。

(本論文に関して，開示すべき利益相反事項はない)